■「ちくま評論入門」解説――読解問題への過程

8　下條信輔「視線のカスケード」

■目標　本文の説明をしっかり捉えなおして説明しなおす。

■追跡

①　人は悲しいから泣くのだろうか、それとも泣くから悲しいのだろうか。もちろん悲しいとわかっているから泣くのだ、という人がほとんどだろう。しかし心理学者、生理学者たちは むしろ 泣くから悲しく感じるのだ、と主張してきた。

「泣くから、悲しい」。もはやこれは、常識の範囲になってきた。「顔の筋肉を緩めて笑顔にするから、楽しい気持ちが生まれる」。逆ではない。これは、さまざまな実験や観察から明らかになってきた。

「むしろ」は、不等号に当たる。Aではなく、むしろ、B。A＜B。「むしろ」が出てくるとき、ABという二項が比較されていることに注意。

②　1この説は直感に反するように見えるかも知れない。しかし実際に感情（生理反応を含めて情動と呼ぶ）を経験する場面を考えると、案外そうでもない。たとえば山道で突然クマに出会ったとしよう。まず状況を分析し、自分は怖いのだ、と結論してからおもむろに逃げる人がいるだろうか。足が反射的に動いて山道を駆け下り、人里に辿り着いて一息ついてから恐怖が込み上げて来る、という方が普通ではないか。また人を好きになるときは、「気がついたらもう好きになっていた」ということが むしろ 多いのではないか。身体の情動反応が先にあり、それが原因になって感情経験が自覚されるという訳だ。「身体の情動反応が感情に先立つ」という話の順序が逆に見えるのは、身体の情動反応が無自覚的（不随意的ともいう）であることが多く、気づきにくいからだ。

「かもしれない。しかし」は、譲歩の論理。そうかもしれない、といったん譲った形にして、でも、いや、と、譲ったことを否定して、自分のいいたいことにもっていく。「え、そうなの？」と思うかもしれないが、実例を見れば、納得するでしょ？　「むしろ」も使われている。ここでは、「意識的に好きになる」＜「無意識に好きになり、後で気づく」。

行動が感情を生む。これが論旨の中心。

読解問題1「この説は直感に反するように見えるかも知れない」とあるが、なぜか。

本文から探そう。ここ。「「身体の情動反応が感情に先立つ」という話の順序が逆に見えるのは、身体の情動反応が無自覚的（不随意的ともいう）であることが多く、気づきにくいから」。そのままでいいなら、

解答例1「身体の情動反応は無自覚的であることが多く、気づきにくいから。」

なんや、抜き出しやん。詳しくしたかったら、どうする？

「この説」って？　「反する」って、何と何が？　本文の語句のままで組み立てると、

解答例2「身体の情動反応は無自覚的であることが多く、気づきにくいので、私たちは先に感情経験を自覚しがちである。そのため、身体の情動反応が先にあり、それが原因になって感情経験が自覚されるという説は、身体の情動反応と感情経験の順番が逆なのではないか、と感じるから。」

直感に反する、とはどのようなことをいっているのか、についても書き足した。「順番が逆なんじゃないの？って感じること」。もっとなめらかにしておこう。

解答例3「身体の反応は無自覚的で気づきにくく、私たちは感情を最初に感じるため、身体反応が先にあり、それを原因として感情を自覚するという説は、反応と感情の順番が逆ではないか、と感じるから。」

③　筆者らは最近の研究で、「好きだから人はそれを見るのか、それとも見るから好きになるのか。」という問いを立てた。この問いに答えるため、画面上に顔写真をふたつ並べて出し、被験者には「よく見比べて、どちらがより魅力的か判断して下さい。決めたら直ちに左右どちらかのボタンを押して答えて下さい。」と指示した。そしてその間の被験者の眼球運動を測り、ボタンを押すまでにそれぞれの顔に視線がどのように配分されるかを調べた。

どういうしくみか、わかるかな。①②の説どおりなら、「長く見るから、好きになる」という結果になるはずだが。

④　すると面白いことがわかった。ボタンを押す1秒ぐらい前から視線の向き方が少しずつ偏りはじめ、片方の顔を見ている時間がほぼ80％以上に増大した時点で、そちらをより魅力的と判断するのだ。同じことは、あらかじめの評価で魅力度に大きな差がある顔をペアにした場合でさえ起こった。

左右平等に見て、判断し、押す。というのではなくて、どっちかを長ーく見て、ほとんどそっちばかり見るようになって（行為）、判断（好き）が自覚される。明らかに、こっちが好きという判断がすぐ出るだろう、というケースでも、見る、があって、押す。「長く見るから、好きになる」仮説が支持された。

⑤　私たちが視線のカスケード（連鎖増幅）と呼ぶこの現象は、たとえばより丸い方の顔を選ぶというような課題では見られなかった。つまり視線の動きと「好き」という判断との間だけに、特別な関係が見いだされたのだ。被験者はボタンを押す直前まで自分の判断を自覚できていないはずなので、目の動きという身体反応が、意識よりも先に判断を示していたことになる。「見るから余計に好きになる」ということだ。この因果径路と「好きだから見る」という逆の径路とが互いに促進して、視線のカスケードを起こすらしい。

「より丸い」というのは、物理的な形の判断なので、感情とは関係ない。行動（視線の動き）と感情（ボタンを押す）のときにだけ、「見る→好き」が見られたというのだ。ボタンを押す＝好き、というしかけは、心理学の実験でよくあるものだが、〈好き〉といった感情は目に見えないので、ボタンを押すことで、好き、を自覚しているものとみなすように工夫されている。

「カスケード（連鎖増幅）」という名前は、「行動→感情」が一度きりのものではないことを示している。「見る→好き」が「好き→見る」という回路に接続し、さらに「見る→好き」が作動し、また……というふうに、「好き／見る」がどんどんふくらんでいく。

⑥　もしこれが本当なら、ふたつの顔への視線の配分を人工的に操作することで、被験者の選好判断を偏らせることさえできるはずだ。そこで、ふたつの顔を左右に交互に異なる時間だけ呈示し、被験者にそれを視線でフォローしてもらった。すると予想通り、より長く注視していた方の顔を魅力的と判断する確率が高まった。またこのとき、単純により長く見ていることが重要なのではなく、自発的に視線を向けて見ることが重要なこともわかった。

「見る」時間をコントロールしたら、「好き」の感情もコントロールできるのか――できた、というのが結論だ。ただし、むりやり見るよりは、自分から見ることが、「好き」に影響する。――なんども画面に映るタレントを、なんでか知らんけど「好き」なるというのは……。

⑦　視線を合わせて「目で語り合う」ことで親密度を増すスタイルのコミュニケーションは、ヒトという種に独特のものだ。猛獣やサルなどでは、むしろ目を合わせることは威嚇や敵意の表現である場合が多い。ヒトに特有のこうした目によるコミュニケーションが進化する過程では、視線のカスケード現象に見られる体と心の相互作用が、大いに役立っただろうと想像できる。

ヒト＝目をあわす→「好き」／サル＝目をあわす→「敵意」。ヒトは、〈目をあわす→「好き」〉という能力を進化させてきた。私たちには「見る→好き」の遺伝子が潜んでいる。ま、中には、「目をあわす＝ガンを飛ばす」という文化もなくはないけど…。

⑧　実際、人は他人の視線の方向や動きを素晴らしい感度で検出できる。2このような知覚能力が進化したのはどうしてだろう。相手の視線が、相手の心の中の状態、たとえば自分への関心や好意などについて有力な手がかりを与えるから、と考えるのが自然だ。「目は口ほどにものを言い」「目は心の窓」というわけだ。

問い。「他人の視線の方向や動きを鋭く感じ取る能力が進化したのはなぜ？」。答え。「相手の視線が、自分への関心や好意を知る手がかりになるから」。

⑨　しかしさらに、目の動きが心の中を知るよい手がかりになり得るのは何故か、と考えると、まさにその答えを視線のカスケード現象が与えてくれる。というのもそれは、目による心の表現と見なせるからだ。

問い2。「目の動きは、どのようにして心の中を知る手がかりになるのか？」。答え。「視線のカスケード（連鎖増幅）現象を、目による心の表現と見なすことによって」。

⑩　つまりこういうことだ。相手の視線に敏感な人ばかりが周囲にいるとし、その中でより親密にコミュニケートできることが生存、繁殖に有利だとすれば、目を使って心をよく表現できる者に、子孫をより多く残すチャンスが与えられるだろう。

1　目を使って心をよく表現できる者（発信上手）＝子孫をより多く残す。

⑪　また逆に、目を使った表現に長けた者ばかりが周囲にいるとすれば、視線を敏感に知覚できる能力が繁殖に有利となり、そうした知覚能力の遺伝的基盤が世代毎に拡大再生産されていく。

2　視線を敏感にキャッチできる者（受信上手）＝子孫をより多く残す。

⑫　こうして視線による表現と、視線に対する敏感性とが、互いに自然淘汰の圧力となって、他の種にはないヒト独自の「目で語る」社会行動の進化をもたらしたと考えられる（このような双方向の進化を「共進化」とよぶ）。

1目で心を発信し、2目による発信を受信できる――者たちが、ヒトとして生き残る、というわけ。みなさんは、どう？

読解問題2「このような知覚能力が進化したのはどうしてだろう」とあるが、その理由を説明しなさい。

本文の語句そのまんまでいくなら、

解答例１「視線による表現と、視線に対する敏感性とが、互いに自然淘汰の圧力となって、他の種にはないヒト独自の「目で語る」社会行動の進化をもたらしたから。」

ぜったいここだけど、よくわからないね。かみくだく努力をしよう。

⑩段落の「相手の視線に敏感な人ばかりが周囲にいるとし、その中でより親密にコミュニケートできることが生存、繁殖に有利だとすれば、目を使って心をよく表現できる者に、子孫をより多く残すチャンスが与えられる」と⑪段落の「また逆に、目を使った表現に長けた者ばかりが周囲にいるとすれば、視線を敏感に知覚できる能力が繁殖に有利となり、そうした知覚能力の遺伝的基盤が世代毎に拡大再生産されていく」をくっつければ、「互いに自然淘汰の圧力となって」の部分を噛み砕ける。

やってみよう。

解答例２「相手の視線に敏感な人が多い場合、目を使って心をよく表現できる者は、配偶者を得やすく、その遺伝子が残りやすい。逆に、目を使って心をよく表現できる者が多い場合、相手の視線に敏感な人は、配偶者を得やすく、その遺伝子が残りやすい。よって、視線に敏感な者と視線で表現できる者は互いに配偶者になることによって、それぞれの遺伝子を残し続け、一方、そうでない者たちの遺伝子は残らず、結果的にヒトは、目で語りあう知覚能力がすぐれた種として進化したから。」

長いな。百字ぐらいにしてみよう。

解答例３「視線で心を表現できる者は、視線に敏感な者との間に、視線に敏感な者は、視線で心を表現できる者との間にそれぞれ子孫を残すため、長い進化の結果、視線によるコミュニケーションにすぐれた子孫が支配的になるから。」

このように、同じ内容をいろいろに表現しなおしてみるのは有益だ。よくわかって、言葉を尽くして説明できる状態から、言葉を削る。この方向での訓練が何より大事。構文を崩さず、言葉足らずにならず――言葉の柔軟体操をやっているうちに事の核心がより確かにつかめるようになる。

⑬　いずれにしても、言葉による自覚的なやりとりは、視線や身ぶりなどの無自覚的なコミュニケーションに支えられている。決して逆ではない。

⑭　誰かを好きになろうと思うなら、その人と頻繁に会うことが助けになるだろうが、それだけでは足りない。自分からその人と幾度も視線を合わせることだ。もちろん実験室の発見が実生活にすぐ応用できる保証はないが、試してみる価値はあるかも知れない。

これは覚えておいて損はない。たぶん。やりすぎるとヤバイ気もするが――。

読解問題３　「視線のカスケード」現象が起こるのはなぜか。

注目するのは、⑤段落。「（被験者はボタンを押す直前まで自分の判断を自覚できていないはずなので、）目の動きという身体反応が、意識よりも先に判断を示していたことになる。「見るから余計に好きになる」ということだ。この因果径路と「好きだから見る」という逆の径路とが互いに促進して、視線のカスケードを起こすらしい。」

本文そのままなら、

解答例１「目の動きという身体反応が、意識よりも先に判断を示す（「見るから余計に好きになる」）という径路と「好きだから見る」という逆の径路とが互いに促進するから。」

見るから好き、と、好きだから見る、を使ってわかりやすく書くと、

解答例２「無意識にまず見てしまうから、好きという意識が生まれるという径路と、好きだと意識するから、見てしまうという径路が互いに促進されるから。」

身体反応・意識という抽象的な言葉だけで書くと、

解答例３「目の動きという身体反応が、意識よりも先に判断を示すという径路と、逆に意識するから目の動きという身体反応を促すという径路が、お互いに促進されるから。」

「３」は解答としてはありだが、本文を読んでない人がこれだけ読んでも、何のことかわからないね。

■読解問題

１　「この説は直感に反するように見えるかも知れない」とあるが、なぜか。

２　「このような知覚能力が進化したのはどうしてだろう」とあるが、その理由を説明しなさい。

３　「視線のカスケード」現象が起こるのはなぜか。

■発展問題

「言葉による自覚的なやりとりは、視線や身ぶりなどの無自覚的なコミュニケーションに支えられている。決して逆ではない」という指摘があった。実例を挙げ、自覚／無自覚が一致する場合と、矛盾する場合について、それぞれがどのように違うか、何によってその違いが生まれるのか、論じなさい。

●重要語「知覚」＝感覚器から入る情報を処理して、そうである、と認識すること。とはいえ、必ずしも自覚的に認識しているわけではない。われわれは、もともと持っている認識の構造にしたがって、見てしまい、聞いてしまう。